

平凡社ならではの最先端設計

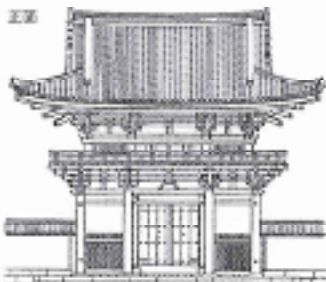
【門】 日本各地の門

東面



主門 大光寺主門

西面

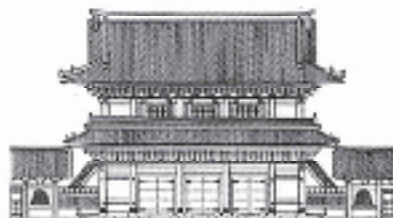


1m

細部までわかる精細なモノクロ図版



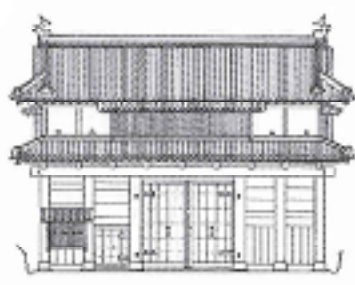
二重門 大光寺二重門



5m



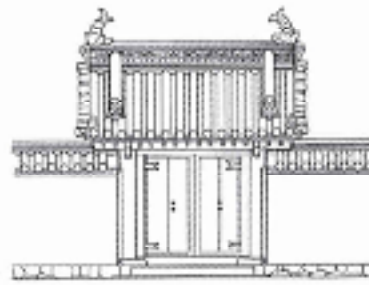
主門 四国寺主門



1m



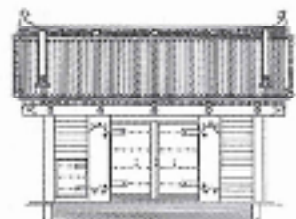
主門 四国寺主門



1m



主門 四国寺主門



1m



主門 四国寺主門



1m

朝廷と内裏で用いられ、天皇、皇后、親王および中納言以上に限られ、しかももっぱら儀式用であった。形式は正倉院の胡床と同じで、天皇は黒袴、茶植、皇后は柳細が、皇太子は平文のいすで、様式という敷物の上に置き、座の上に座敷を置いた。鎌倉・室町時代には禅宗の移入とともにいすが再び中国からもたらされ、種類も多くなり、禅僧が多くこれを用いた。中でも「曲象」が流行し、自然木を利用したいすや竹いすなども作られた。禅堂では、四脚形式のものは上に扶座し、交椅は腰掛け、背もたれには法衣を掛け承足を置いた。中世にこれを使ったのは僧たちだけで一般にはなかったが、戦国から桃山期にかけて再びいすが使われるようになった。織田信長は官軍から贈られたピロートの大いすで闘兵したと伝えられ、大名や富裕階級の間では花見や茶会などにもさかんにいすを用いている。このころは曲象交椅が多かったようで、高台寺に残る西王母掛軸交椅や菊鹿掛軸交椅などは華麗な意匠をもつ。いすの流行は当時の南蛮趣味によるとも考えられるが、やはり中国の影響が大きかったと思われる。中国明代には多彩に発達するが、人々がとりわけ好んだ曲象交椅がおそらく桃山期に導入されたの

いす 伊豆[市]

静岡県東部、伊豆半島の中央部にある市。2004年4月天城湯ヶ島村、修善寺町、土肥、中伊豆町の4町が合併して成立した。

【天城湯ヶ島】伊豆市中央部の旧町。旧田方郡所屬。人口7960(2000)。伊豆半島中央部に位置し、狩野川の上流域を占める。東・南・西の三方を天城連山に囲まれて、町の大部分は山林で占められ、杉、ヒノキなど、良材を産出するほか、ワサビ、茶など、特産がある。狩野川と支流の谷間は水田や果樹園に利用されているが、耕地が少なく経営規模が小さいため、年々農業の地位は低下している。富士箱根伊豆国立公園に属し、狩野川の清流に輝くところに温泉が湧出し、湯ヶ島をはじめ、修善寺、吉宗、月ヶ瀬、船原などの温泉が点在する温泉郷になっている。湯ヶ島温泉は単純泉、セッコウ泉で、泉温は50℃。木下圭太郎、若山牧水、井上靖らの文人に愛され、川崎康成の《伊豆の踊子》は湯ヶ島で執筆された。近世初期に金山の開発が行われ、特産金山では1978年まで金の精錬が行われていた。天城原山林におおわれ、野鳥も多い南部一帯は《附和の森》に指定され八丁池、浄蓮の滝の名勝を中心に観光開発が進めら

間に船便もある。

【中伊豆】伊豆市東部の旧町。旧田方郡所屬。人口8313(2000)。伊豆半島中央部に位置する。町の南部は伊豆地方最高峰の万三郎岳(1400m)を主峰とする天城連山がそびえ、年間2500mm以上の多雨地帯であり、天城国有林が広がる。町の中央部を大見川が北流して狩野川に注ぐ。町域の大部分は山林で、ワサビ、シイタケが栽培され、大見川と支流の低地では稲作が行われている。伊豆スカイラインの開通(1964)、白岩温泉(単純泉、セッコウ泉、49℃)の湧出(1963)などもあって観光開発も進んでいる。大見川下流域には縄文中・後期の土白岩遺跡の跡があり、環状列石遺構をもつ。

いすい 渭水 Wei shui

中国、陕西省中部の黄河最大の支流。渭河ともいう。甘肅省南部の鳥鼠山から発し、東流して陕西省北流に入り、西安、隆慶などをへて潼關県で黄河と合流する。泾河、泾河、洛河など支流も多い。全長787km。北の黄土高原と南の秦嶺の間の陥没地帯に沖積平野の間中平野すなわち渭水盆地を形成する。この地域には周の鎡京、秦の咸陽、唐の長安などが築かれ、早くから渭水水系を利用した灌溉渠道が開削されてきた。前246年、涇河

実物大組見本